



きょうようときょういくのままに ⑩

教育工学 EdTech イノベーション

東京学芸大学名誉教授 篠原文陽児

令和元年5月。ワープロマシンやワープロソフトが出始めた頃、キーボードから「れい」と入力しディスプレイに表示された文字の一覧から「令」を見つけ、リターンキー。次いで、「わ」と打って……、ようやく、令和。教育のシステム化を課題のひとつとする教育工学の黎明期。文部省(当時)科学研究費補助金の複合領域に科学教育(含教育工学)が登場する少し前の漢字入力法の一例である。

教育工学の英語表記はEducational Technology。この省略形がEdTech。

ところが、今日、この逆が成り立たない。つまり、EdTechは、教育工学ではなく、造語「教育×テクノロジー」を意味し、教育にイノベーションを起こすビジネス、サービスなどの総称であるという理解の場が多くなってきている。FinTech(金融×テクノロジー)やMedTech(医療×テクノロジー)など多数あるX-Techのひとつ。X-Techは、デジタルやICTを既存の産業に掛け合わせることで新しい価値を生み出す。そうした中のひとつ、EdTechである。

産業といえば、経済産業省。平成30年1月、省内に「未来の教室とEdTech研究会」を発足させ、今年3月までに7回の研究会を開催。昨年6月には「50センチ革命×越境×試行錯誤」「STEAM(S)×個別最適化」「学びの生産性」を骨子とする第1次提言を公表。そこでは、EdTechは、革新的な能力開発技法全体を広く指すとしている。

平成31年3月7日(木)。春の訪れが近い季節の変わり目。小雨が冷たく肌を刺す中、経済産業省の取組を勉強するようで、セミナーにいく。

セミナーは午後5時開始。会場はJR新橋駅と

直結するビルの12階。セミナーの表題は、「未来の教室における教育ICT環境とは—変革する学び方と教え方—」。参加者は50名の限定である。

主催者の挨拶の後、経済産業省サービス政策課教育産業室室長補佐K氏が登壇。「人生100年時代」、「第4次産業革命」等といわれる社会システムの変革期にあって、諸外国で世界的に人材開発競争が激化する中、日本においても今後の産業・地方創生人材を担う人材を育成することが喫緊の課題。そのため、経済産業省は、就学前教育・学校教育・リカレント教育の現場が目指すべき「未来の教室」の姿と、必要なEdTech開発の方向性、その導入に向けた課題を検討するための研究会を設置し、「未来の教室」とEdTechプラットフォームを立ち上げ、平成29年度には50件の実証事業を実施するなど、これまでの取組と今後の展望を語った。

引き続き、通信教育大手のZ社による「未来の教室」の実証事例、北海道等に拠点がありベトナムでも事業展開するR学習塾のタブレット端末による反転授業の事例、そして、K社による教育ICTへの取組と導入支援、それぞれの紹介の後、質疑応答があり、午後7時半過ぎ閉会となった。

教育工学と視聴覚教育は、教育の理想と現実のギャップに悩まされながらも、イノベーションを象徴するTechnology-PushかDemand-Pullかの議論に一定の成果をもたらし、変化する教育環境に対応した教育の発展に貢献してきている。

これらを念頭に、新たなEdTechが、多様化が許容される新たな社会に生きる学習者に、質の高い教育を実現する原動力のひとつとなることを期待したい。